

# SOMPOインスティテュート・プラス

## 「幸福度」について意見交換 第1回幸福度研究会を開催

SOMPOインスティテュート・プラスは4月10日、第1回幸福度研究会を開催した。同研究会は、GDPに代表される経済的指標だけでは表しきれない「幸福度」に迫る試み。わが国のような成熟段階にある国にとり、「幸福度」は特に有益と考えられるが、現在までのところ、必ずしもわが国の経済社会に浸透しているとは言いえないのではないかと、という問題意識から、同研究会を立ち上げた。今後は月1回のペースで開催し、10月末に報告書の取りまとめを目指すとしている。なお、同社は事務局として、議論のテーマ設定・取りまとめを行った。

幸福度研究会は、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授の前野隆司氏が座長となり、座長代理にSOMPOインスティテュート・プラス理事長の迫田英典氏、委員は、京都大学人と社会の未来研究院長・教授の内田

素(例えば、穏やかさ、安心・安全、充足感、周囲との協調)があるはずで、そこにも目を向けていく必要がある。▽国連は、主観的幸福度が何によって規定されるのかを六つの要素(経済水準・健康・選択自由度など)で要因分解しているが、これらの要素では説明できない部分も多い。そして、六つの要素だけで見ると、日本のランキングは上昇する。このようにしてみると、順位そのものにこだわらるのではなく、むしろこれまで着目

をどの程度規定するかというウエイトも、高度成長期などに比べて今は低下しているはず。こうした視点も含めて、国民に納得感をもって受け止められるような指標は何かを考える必要がある。▽若い世代のウェルビーイングに対する意識は高いと感じる。「成長する会社かどうか」よりも、「どういった価値を提供しているか」を問う若者は多い。このように、幸福やウェルビーイングについては世代差や性差があると考えられる。ここを

イモニア(人生の意義や目的意識)によって規定されるという研究成果がある。ただ、ここに含まれない追加的な要素もあろうか。また、そもそも日本の内閣府の調査などでは、「生活評価」を主に尋ねるような調査体系となっていて、エウタイモニアの要素を十分に測定できていない面もある。▽北欧などを複数回訪れた経験から実感としては、北欧は日本に比べて余裕ある暮らしをしている印象。また、日本は、身体的な健康水準は高い一方、精神的な健康水準は低いとされるなど、ハ

いアプローチ・視点があってもよいのでは。また、格差の拡大が指摘されるなかで、そうした現状をどう捉えて、どう変えていくのかという視点も、幸福度を考えるにあたって重要な視点ではないか。第2回は5月8日に予定しており、これらの意見を踏まえて、より踏み込んだ議論に入っていくとしている。

## 10月末に報告書の取りまとめ目指す

帆氏、日本若者協議会代表理事の室橋祐貴氏、(株)電通総研フェローの山崎聖子氏の8人で構成。第1回は幸福度について、①国連のWorld Happiness Report 2024では日本人の幸

委員が意見交換を行った。委員からは、▽主観的な幸福度を10段階で尋ねる国連などの方法では、経済的要素が強く影響している。既存の尺度では掘(すく)いきれない要

されてこなかった要素に焦点をあてて議論することが重要。▽所得を例にとってみると、所得の「水準」よりも「変化」のほうに満足度により強く影響するのではないかと。また、所得が満足度

掘り下げていってもよいのではないかと。(世代差や性差に着目すべき、という意見は複数の委員から上がった。)▽主観的な幸福度は、「生活評価(生活に対する自己評価)」「感情」「エウタ

ー」面は豊かだがソフト面が豊かでない。さらに、自己決定(自分で物事を決められる)が大きく欠けている。(自己決定に着目すべき、という意見は複数の委員から上がった。)▽幸福と社会



委員が意見交換を行った